

村上大祭のしゃぎり屋台

おしゃぎり会館一階展示場には、毎年7月6日（宵祭）・7日（本祭）に行われる村上大祭に曳き廻されるしゃぎり屋台三台を中心に荒馬14四騎と笠鉾などを展示しています。漆塗りが施され、金箔に彩られたしゃぎり屋台は、ここ訪れる方々から、感嘆の声をいただいております。

また2階展示場には、村上の歴史資料や武具刀剣等を展示し、村上の歴史資料館としての役割も果たしております。



大工町のしゃぎり屋台

大工町のしゃぎり屋台は、町名が示すとおり部材の内部をさくりとって軽くするための技法がこらされている屋台です。

乗せ物は、高砂で夫婦の和合と長寿を祝福し、万民の幸福と長寿、天下泰平を願い乗せ物としたと伝えられています。



上町のしゃぎり屋台(嘉永3年創建)

上町のしゃぎり屋台は、朱漆を多く用い、精巧な彫刻で全体を飾っています。

乗せ物は「寛永十年六月羽黒山大権現」と金箔をほどこした大きな鐘(梵鐘(ぼんしょう))で、梵鐘の音の響きは、煩惱を消すといわれています。また寛永10年は羽黒神社が新築されて、祭礼が始まった年です。

しゃぎりの製作者は、名工有磯周斎といわれています。それだけに精緻で豪華な彫刻がつけられています。



大町のしゃぎり屋台(明治七年創建)

黒漆と金箔を用いたもので、現在のしゃぎりは3台目で、前のしゃぎりは、豪華なものであったといわれています。

乗せ物は「諫鼓に鶏（かんこにとり）」で、諫鼓とは、昔の中国の伝説で、聖天子という皇帝が、政治のやり方について諫めようとする民に、打ち鳴らさせるために設けた太鼓のことです。その上に鶏がとまっていることは、政治が安定していることをたとえたもので、平和の象徴として考えられています。



朱鷺（とき）屋台

平成3年に新潟県が製作したもので、「新潟ふるさと村」に長らく展示されてきました。平成23年に村上市に譲渡され、それ以後当館に展示されています。

乗せ物は県の鳥でもある天然記念物の朱鷺に乗った安寿と厨子王です。

村上大祭には曳き回さない展示用のしゃぎり屋台ですが、近年ではイベント開催時にこの屋台を利用し、曳きまわしが行われることがあります。



傘 鉾（かさぼこ）

傘鉾とは、傘の下に神が依（よ）り集まるという信仰によるものです。傘の上に突き出たものを「ダシ」と呼んでいますが、これが村上ではしゃぎり屋台という山車（だし）の語源です。傘の周囲には水引幕をまわし、傘の中には様々な縁起物が下げられています。こうした下げ物は悪霊を追い払ったり、福を招いたり、神を招いたりするものです。

現在、おしゃぎり会館には5つの傘鉾が展示されています。



荒 馬（あらうま）

村上大祭(羽黒神社例大祭)のまつり行列の先導を務めるのが庄内町の荒馬 14 騎です。この荒馬は、戦国時代の村上の武将本庄繁長が庄内より凱旋したときの姿を模したものと伝えられています。その真意は別として、祭礼に供奉する御神馬（ごじんめ）の姿と英雄伝説が重なって今に伝えられてきたのではないのでしょうか。

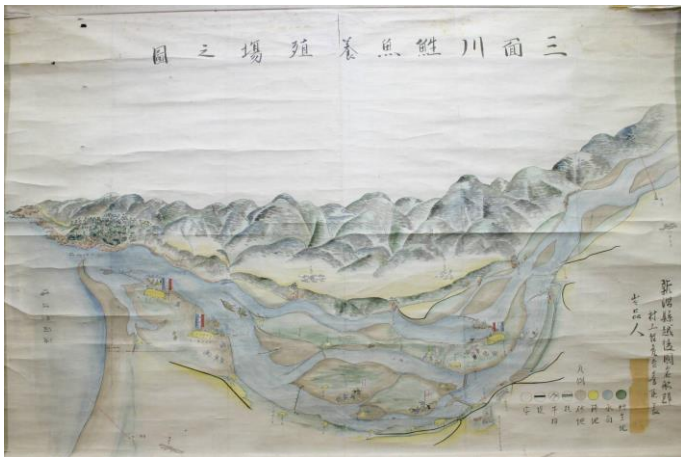
馬の後ろに立てる馬印も 14 騎それぞれ特色がありますが、火消の纏と同じ意味で、神の力がこもると信じられていました。



三面川鮭魚養殖場之図

明治時代の三面川の鮭養殖場(種川)を描いたもので、鮭の居操網漁や持網漁や地引網漁、人工採卵などの様子が描かれており、当時の鮭漁や種川の様子をよく知ることができる貴重な資料です。

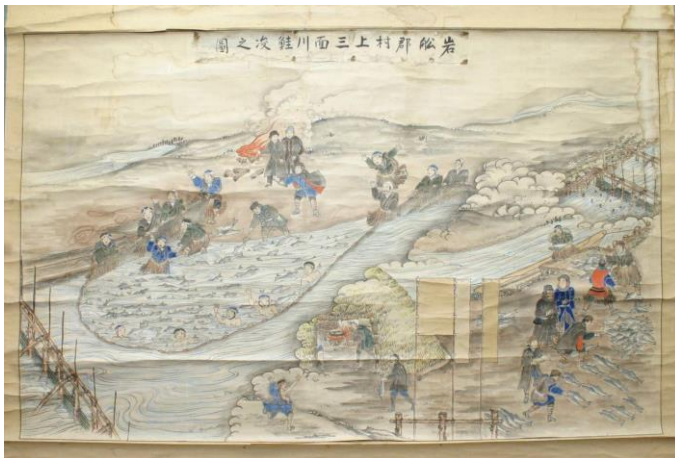
この絵図は、当時の産業博覧会に出品したもので、絵の出品人として「新潟県岩船郡村上鮭産育養所(けいさんいくようじょ)長」とあります。写真や動画のなかったこの時代、こうした絵を描いて村上の鮭の養殖場の様子を伝えたのでしょう。



三面川鮭浚（おさらい）之図

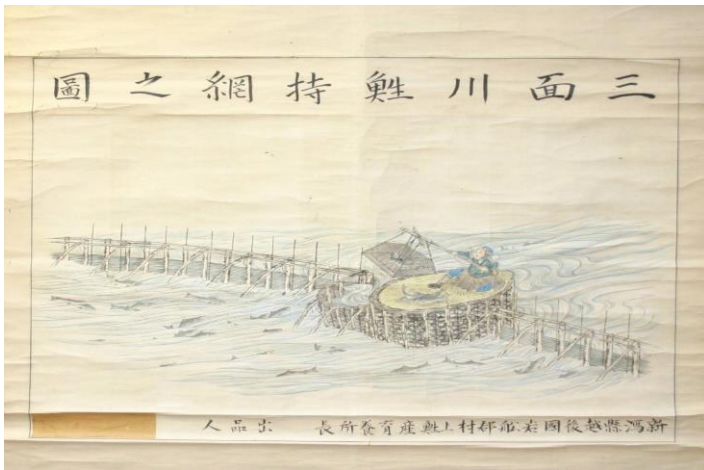
種川での鮭漁のことを他の漁と区別してお浚いと呼んでいました。種川での水揚げの一割は漁に従事した漁師に与えられ、残りは鮭産育養所の所員(士族の家庭)に配当されました。この絵図にはそのお浚いの様子がよく描かれています。漁師の顔にも豊漁の喜びがあふれています。

お浚いのあった日には、士族の家々を『鮭でやーあんす』と言って周り、家庭に鮭を配ってあるいたといいます。



三面川鮭持網之図

鮭漁の伝統的な漁法として「持ち網漁」があります。川幅いっぱいに止め簀（す）をたて、流れの中ほどを二坪ほど開け、簀囲いをしてウケ場を設ける。ウケ場には四ツ手網を沈めて鮭の遡上を待ち、鮭がウケ場に入ると網を上げるという漁法です。この絵図にはその持ち網漁の様子が描かれています。鮭が遡上するのは天気の良い日で、夜に行動することが多く、10月から12月の寒い夜の仕事であったといえます。



三面川鮭居操網之図

川上から二艘の船が、それぞれ居操り網のついた竿を持ち、両側に分かれる。遡上する鮭が網に入ると、すかさず二艘の船を八の字型に閉じるとともに、網も閉じて片方の船に上げる。鮭はここで桐の木のタタキ棒で頭部を打たれ、仮死状態にされて運ばれました。

居操り網は、鮭の遡上するノボリミチを見つけ、網を流せば必ず捕れたといいます。漁の開始時、二艘が網を広げながら「恵比寿サマ」と唱えながら豊漁を祈願したといいます。

